REAL SCENE
気になる仕事の現場

#01 映画業界の仕事人

「カンヌ映画祭での初仕事は、"ミッション・インポッシブル"そのものでした。」

映画アシスタント・プロデューサー　佐々木香織さん

取材／ティー・ビー・オー
撮影／佐々木香織、まつかわゆま
取材協力／経済産業省
J-Pitch/ユニジャパン

メイン会場はパレと呼ばれ、毎年ごとにデザインに凝ったビジュアルで赤じゅうたんと共に人目を引く▶

世界一華やかといわれるカンヌ映画祭だが、映画関係者たちにとっては、ビジネス・バトルの場だそうです。そんな中で、デビューを果たした映画プロデューサーのカンヌの日々とは？　奮闘ぶりを一挙公開します。

60周年の昨年に比べ、地味めだと言われた今年のカンヌ映画祭。実際出かけてみたら、地中海を前にしたロケーションと、どこを見回しても"おフランス"な演出が一杯。セキュリティー・チエックのおじさんたちでさえ、"ムッシュ"しているし、赤じゅうたんの両脇を一杯にするカメラマンも、全員がタキシード姿。その徹底振りには脱帽してしまいましたと、佐々木さん。

華やかなカンヌは、映画作りの初めの一歩。きっかけ作りの場。

映画配給・製作会社の巴里映画で働く彼女は当初、カンヌ経験豊富なプロデューサーのお供で、「カンヌ参り」の予定でした。しかし、ベテラン上司は、なんとドタキャン。すべて彼女に託されることに。しかし、持ち前の好奇心と、チャレンジ精神で、ひるむことなく単身でカンヌ・デビューを、ものにしてしまった佐々木さんでした。

巴里映画は、過去フランスと共同製作・配給した「サム・サフィ」の、ヴィルジニ・テヴネ監督の新作を企画。フランスのパートナー探しがカンヌでの目的でした。

「フランス側のプロデューサーも、日本の優れた共同製作企画を探しているんです。候補となる人脈にアポイントをとり、英語版の企画書やシナリオを渡し、交渉することが今回の仕事。手ごたえがあれば、その日のうちに日本に留まった上司のプロデューサーにメールで報告。海を越えての指令を受け、次の動きを考え実行に移さなくてはならない。連日、セミナー、ミーティングで一杯になっている中で、コンペなどの観るべき映画も探し当てる。時間との戦いの毎日でした」

まさしく映画の『ミッション・インッポッシブル』さながらの日々だった様子。そうなると、チケットをゲットする必要や、正装のドレス・コードがある、あのあこがれの赤じゅうたんを上る"夜のコンペ上映会（ソワレと呼ばれる）"に臨でるのは、後回しということになってしまうことに気づき、ガックリ。

「華やかな場所で、ちっとも華やかではない地道な立ち回りが続きましたね」

一番の大仕事は、企画作品を大勢の前でするプレゼンテーション。

「イチかバチかでやっちゃいました。かなり抜けはありましたが（笑）」

人脈作りの共通語はフランス、英語よりも、"映画語"が必要。

その後も友達感覚で、毎日のように出会うプロデューサーたちに声をかけまくる。

「語学の問題以前に、コミュニケーションのための共通語は"映画"。知識の足りなさが、むき出しにされた思いです。カンヌで評価の高い監督の過去の映画は知っていなくてはと痛感しました」

果たして、まじめで前向きな彼女の姿は、周囲の関係者からの好感を得、人脈も次々生まれた様子。「ビギナーズ・ラック」も加わって、結果、パートナー候補が見つかり、それだけでも、面目躍如。その結果をパリで監督に直接報告。自分でも「土壇場のクソ力」にビックリ。

「それも、これも初めてだったからこそ、恐れも知らず大胆不敵に行動できたんじゃないかと」

映画製作は持久戦だそうです。自分を信じて、勇気をもって「カンヌ」にチャレンジした佐々木さんには、帰国後も次なる"インポッシブル"な"ミッション"が託されていくのです。

「やはり心残りは、正装して赤じゅうたんを踏めなかったこと。今回の企画がカンヌで上映される時までお預けですね」

新作の完成を楽しみにしたいものです。

審査員のショーン・ペンと審査委員たち。「クラス（原題）」を大賞に選んだ。▼

©PHOTO TRAVERSO

WATCH A DAY
佐々木さんのカンヌでの1日

Scene1
J-pitch 事務局があるジャパン・ヴィレッジのテラスで会議。海を眺め、のんびりしそうで、忙しいんです。

Scene2
関係者だけが入れるエスプレッソやアイス飲み・食べ放題の休息のスペースでホッと一息。

Scene3
誰もが有名そうなプロデューサーに見えてくる。人を見る目も養われますし、度胸も磨かれます。

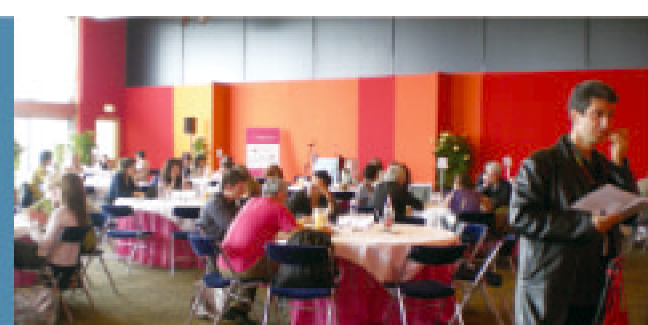
Scene4
「カンヌ」には世界最大のフィルムマーケットがあり、作品セールスをする多くの会社がここでひしめく。

Scene5
「疲れた…」と思っても、数えきれないほどのパーティーにマメに顔を出さねば。これが、見た目よりキツイ。

映画プロデューサーには、初心者もベテランもない。やった者勝ちの仕事です。

今回は、経済産業省の映像コンテンツ事業の一環である、国際共同製作支援プロジェクト J-Pitch（ユニジャパン）と、カンヌ映画祭 Producers Network の協力のもと、テブネ監督の企画が選ばれ、カンヌ映画祭に招かれました。たくさんの応募の中で、監督の書いた脚本もすでにあり、カタチにしやすい状態まで来ている企画だったため、注目度は高かったと思います。5日間に渡ってのプログラムが主催者側から提案され、これに沿って活動。［右の写真が会場の1つ］行動することが学ぶことであり、カンヌはビジネスの場であるだけでなく、映画の知識と人脈の宝庫でした。

毎夕行われるプロデューサーの交流会もカクテルパーティー形式でカンヌ流ですが、これも仕事の場。こんなステキな仕事の仕方を考える「カンヌ」からは、仕事のセンスを学べました。（佐々木）



◀日・仏のプロデューサーの前で発表。「どうにかなるさ精神」の英語で10分。テブネ作品なので有利に働く。

カンヌ映画祭後テヴネ監督が好きなパリの日本料理店で祝杯ミーティング。作品に対する情熱もアップ。▶